

今号の
トピックス

THInet 公式インストラクター活動のご紹介

公式インストラクターとして活動されている小杉一浩さん(2020 年度取得)と昨年度取得された村田美枝さんに活動の様子や思いを寄稿いただきました。共同代表の田澤雄作さんからの推薦図書をご紹介します。(編集部)

小杉一浩さん「児童生徒の心に響く授業めざし」

◆40 回の授業・講演(2022 年度)

私は令和2年度に中学校の校長を退職し現在、福島県三島町の学校教育アドバイザーとして週3日ほど勤めております。現職時代は GIGA スクールの推進を図る一方、ネットによるトラブルや依存症の問題がどの学校でも生徒指導上の問題となっていました。そのため校長会や学校警察連絡協議会等でネット健康問題について話をしていたので、知り合いの校長先生やロコミによる依頼が増え、40回を数えることができました。

◆意識変革めざす授業展開

授業をする上で知識の伝達のみにならないよう気をつけております。授業はいかに児童生徒がネット健康問題について理解し今後の生活に役立てるよう自覚できるかを目的として行っており、簡単なスクリーンゲームを取り入れたアイスブレイキングからはじめ、児童生徒が積極的に発言できる雰囲気を作るようにしております。特に児童生徒は見かけや成績に敏感なので「輻輳」や「成績」の話をすると真剣に説明を聞く傾向にあるようです。また「話し合い活動や実験を取り入れることにより児童生徒の真剣さが伝わった。」と先生方からもいただけるようになりました。

◆「感想」が活力に

授業後は記述式で感想をいただいています。「今まで何度かメディアに関する学習会を聞いてきましたが、今回はなぜスマホの使いすぎが悪いのか理由が明確にわかったのととても勉強になりました。今後は十分注意し生活したいです。」という感想文を読み心からうれしさがこみ上げてきました。

今後もインストラクターとして心に響く授業講演ができるようさらに精進して参ります。



←授業の様子

村田美枝さん「自己研修で子どもや保護者への啓発」

◆子どもと社会をつなぐ架け橋

2002 年から学校現場で働いている。教員は子どもを社会へとつなぐ架け橋の役割を担っている。社会の動きに応じて研修を重ね、子どもたちへ啓発していく立場だ。子どもは集団で遊ぶことから学び、育っていくものであるが、その遊びにゲームが加わり、TV ではなく動画が流布している。

◆ICT 教育は全ての子どもに有効なのか

浅川藍里氏は4人のケース分析により iPad 活用の有効性を検証し、3 つのパターンに分けられると述べている[詳細は「自閉スペクトラム症を伴い意思表示が難しい障害者への ICT 活用に関する研究」[inronshu42_1-asakawa.pdf](#)]。さて、今や学校にタブレット端末が常備される時代になった。しかし、浅川氏のように iPad 活用が不向きな児童生徒がどの程度存在しているのか研究されているのだろうか。なぜ健康や人間関係を害するほど没入してしまうのか、それを回避するためにどのような教育がなされなければならないのか、明確に答えられる現場教員はどれだけいるのだろうか。

◆ICT はどこへ子どもを導こうとしているのか

元グーグル社員のメレディス・ウィカー氏は AI の高度化について「問題なのは、世界で数えるほどの企業だけが、これらの AI を開発し、提供するリソースをもっている…究極的には彼ら(ほんのわずかの企業)の利益につながるようにつくられている」(2023.4.12 朝日新聞)と言っている。この ICT 教育はどこへ子どもたちを導こうとしているのか、子どもたちの脳、身体、行動にどのような変容を生み出すのか自己研修し、健康における危険性については適切な段階で保護者へも啓発する必要性を強く感じている。

田澤雄作さん推薦図書: 成田奈緒子先生著

◆『発達障害』と間違われる子どもたち(青春出版社)

「子どもを原始人に育てよう」が核心ですが、早寝早起き十分眠るそして食事をとり、心の脳(前頭葉)の成長を見守るです。本物の専門家に会えました。子どもが育つ現場で、子どもと視線を合わせて「何が起きているか」「治療が生活習慣をかえるだけで出来る」ことを伝えていきます。(推薦文)